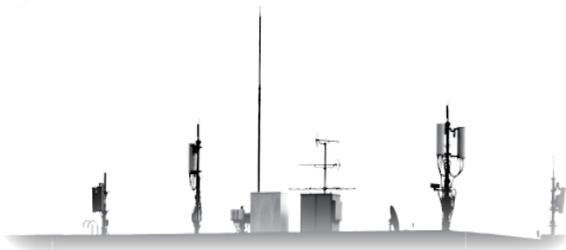


うろたえろ！アンソングローブー 二〇〇四年版



うろこアンソロジー二〇〇四年版 目次

辺野古野辺	水島英己	3
酸っぱい水	清水鱗造	10
9月、まだ太陽が灼熱を続けることについて	富澤守治	12
石川君	若井	16
こごる	よどみに	17
妖怪の一本指		
八月の空	石川為丸	19
チボリ公園の夜	TISATO	23
月夜の水浴び	三井喬子	26
指・耳・目	河合民子	29
霜月大和	倉田良成	33
静かな一本の木	足立和夫	37

辺野古野辺

水島英己

The City's fiery parcels all undone
Already snow submerges an iron year... by Hart Crane
火のように輝くこの都市の小包がすべて開かれたいま、
早くも雪が鉄の一年を埋めつくそうとしている。

へこのへ

ぼくたちの窪みに雪が降る

まりん・すのうが激しく辺野古の海で降る

どこの子 への子

へのこへ

ぼくたちの窪みに雪が降る

あたたかい呪言が慄える 鮮やかな珊瑚の樹木が枯れる

へのこの辺

坐りつくす人を思う

輝かない都市年（としどしと読め）に贈られる

火の小包

氷の嘆き

生きものの息の臭さ

ノコで挽かれる 切られる首の時間の長さ

それでも地下の舞台では「悲歌」が歌われ、「秘密」が共有され

すべてのパフォーマンスにしゅしゅと あるいは 湾曲的にか婉曲的にか

拍手喝采が贈られ

へのこの辺

立ちつくす人を懐う

ツィムプファー医師は

「病状がダイオキシシンによる中毒症状であることは疑いない」

ユシチェンコは

「敵対者から毒を盛られた」

カテリーナは

「昔の白哲の夫に返してほしい」

あらゆる胎盤は未来の胎盤もこともなく毒を通す 遠い水俣の不知火の海を知らず

ユーフラテスの街角を知らず

半ズボン姿の青年ニートは処刑された自らの首を求めてさまよう

ユウ シャル ネバー ネバー ミート ユア ヘッド

「おお 愛とは何か 教えてよ」

そいつは 競馬場の賭けられた馬券のようなものか

それとも 試験場にかけられた携帯電話のようなものか

リテラシーのない大臣たちがエクスタシーのかわりにすすめる

パトリオティズムのようなものか？

愛とはなにか教えてよ、オシエテヨ

ジョン・イル・キム

正妻の制裁、制裁の聖杯、飲みたくもない毒を飲まされて

諸国民は嫉妬や正義で忙しい、己の貧しさを棚上げにして、啓蒙とはなにか？

教えてよ ジュゴン

残の魚よ、残り少ない残のイオ、おまえを滅ぼすために

われわれは醜悪に進化してきた

知恵の柱は猿の入れ知恵、猿からも見捨てられ

辺野古野辺に差羽が飛翔する

優しく入れたり抜いたりするペニスも

鈍く考えたり考えなかつたりする頭も

絶滅した

カーネギーホールを満杯にして歌ったきみの「魔笛」
戦のサナカの
にせコロラトウーラ・ソプラノを支える文化の厚みも
絶滅した

海の向こうのジェンキンス夫人は交通事故に逢い、「美声」を獲得したと語る
もう一人のジェンキンス夫人は身を隠したがっている

どこまで歩いても猿の泣き声と爪を隠した蛇の憎しみに出遭う

大洋は静かに傾くことを忘れた

大地はもうだれも眠らせてはくれない

歪んだ穴だらけの 傷ついた穴だらけの大地に

酔った波が押し寄せる

この一年の傷を抱いたまま 世界中のジェンキンス夫人たちが泣いている

辺野古野辺に差羽が飛翔する

辺野古の沖でザンの白い腹に地球が乗っている

ラムズフェルドとチエイニーとブッシュもライスも

コイズミとその兄弟一党もニホンジンも中国人もイシハラも

ザンの柔らかい白い腹に世界中の人が乗って笑っている歌っている

その上を下をサシバが舞う

地球がもとのようにゆっくりと回転する、ザンも回転する、

半島の指がゆっくりとほどける凍傷にかかったゆびがあたたかくものをつかむ

ザンの上で指導者たちが丸裸になる

サシバがそれをついばむそれを見てザンが笑うぼくも笑い転げる

坐っていた人たちが立ち上がる

立ち上がる

ザンの上で

辺野古野辺で

お休み、それまでお休みなさい

そして静かに起きなさい

いや静かにかれらを起こしなさい

追われ続けた日々

戦い続けた日々

殺され続けた日々はようやく終わり

地球と大洋のために

一人のザンが

ノクターンをその小さな手で弾くだろう

へのこのへ

ぼくたちの窪みに雪が降る

まりん・すのうが激しく辺野古の海で降る

(2004/12/28)

酸っぱい水

清水鱗造

伴走していると

書齋にいろんな昆虫がくる

童話は

その筋にしたがって

「うてなに小人が」

というふうになっているのも

となりで走っているのを見て

の思い

枯れかけた

熟して饅えつつあるものって

いいね

それは

となりにいることができるから

夜

凍った水が降るころ

お話を紡いだり

自分がお話になつたり

釣鐘草の生える

斜面を

歩いている

それは酸っぱい水

しんしんと

更けてくる

9月、まだ太陽が灼熱を続けることについて

富澤守治

(言わば、…)

9月、まだ太陽が灼熱を続ける

そのヒカリのキラメキなかにも

解決していない問題は、問いかけられたままに

痛み続け

加えて腹部の深層より湧き上がる

熱ねつ

太陽には依存しない、悪しき地底よりの「廃熱」

それゆえに吐き出されていない残りの息は、確かに私の胸の内に残っている

悪しき（価値に繋がれて）

問いたがるもの、求めたがるもの

忘れられない、誰かの

心根、悪しきもの

この

世界中を自分の都合の良いように解釈する、何ともか弱き人々の大群

しかし誰ひとりとして、現実を少しでも自分に都合良く変えることもできない

その状況のうちに

問い求め、そして問いかける、・・・それで？

お前はこの世に生きたことになるのか！

それとも逃げおおせるであろうか？

お前の背後に立つ紺碧の絶望

吸い込まれそうな千尋の海

死への道筋さえもお前は知らない

マチガイのないように言っておく

お前とは私のことではない

あなただ

かつて孤独とは自らを生かす、内なる光を聞くことであつた

今日誰も孤独ではありえない
こんにち

それよりも、ひとは何かに脅えている

自立することもできず、「社会」の有り様に

互いに隷属の鎖で繋がれている

渦に捲かれ、光も闇もない

改革は善なるものと言われながら

どれほどか死に迫る病であることか
社会よ、世界よ
応えよ！

石川君

若井

石川君が言ってた

犬はいいよなあ

お尻を拭かなくてすむんだもん

いいよなあ

人間はめんどうだね。

(日本短詩人優勝賞受賞作)

うろこる よどみに

妖怪の一本指

うつ ぶせ に
かたく め を とじ
みみ を すます

はる か かなた の
かたい あし おと に
ふみ にじ られる までの
あわい ねむりに

かつて みず を たたえて
ほし あかり を うつす なごり

きり さき たく なかった から
ちぎって なかみ を とり だす
ばら ばら に なつて も
こわれ たり しない けれど

たどる あし あと に そつて

まよい はじめる だれか の
おもい は かるく かげ に まう

だれか に はこ ばれ なくて は
ここ には とどか ない けれど

よど む みず たまり に

おり がみ の こぶね うかべ て
みなみ かげ ふき ぬける を まつ

八月の空

石川為丸

その日も、光は烈しく島に降り注いでいた。

夏の日の宜野湾

すぐそこには 東シナ海も見渡せる この高台から

ふりかえれば ひろがる白い建物の並ぶ市街地

そこで 多くの人たちが 生き 暮らしているのだ。

島はいつかんとて物体としての海や空を拒んできたはずだったが 上空の、戦闘訓練を

続行する 米

軍 普天間基地所属 CH53 スタリオン・ヘリコプター

上空を、旋回し 墜落した

沖縄国際大学 本館

黒焦げにされたナンヨウスギの梢を騒がせ 過ぎた 八月の日の

不条理の地理

その場所に到る わたしたちの道は閉ざされていたのだ
行くことを阻まれた土地の

黒焦げにされたナンヨウスギの梢を見あげれば 青あらし

わたしたち自身の位置が ありか 問われていた

(ここは いまも死と背中合わせだ)

戦争の過去(ストーリー)のあらわになるところ

飛散し、壊れた尾翼に ひき裂かれた緑の土地

木々のほの暗さのなかで ねむるようであった うがんじよ はずやかな拝所 ここにも

かなしいほどに烈しく 光が降り注いでいました。

墜落した 米軍 普天間基地所属 CH53 スタリオン・ヘリコプター

にもかかわらず、

「ただひとりの死者も出なかったのは……」

あの沖縄戦の死者たちの思いが……」

子供らの そんな素朴な問いかけがあつて

風の中 公式の、羽根のような言葉に

海のかなたの 碧落から

死者たちは 怨みの眼差しで 私らをみつめるだろうか

死者たちとともにあった 近くて遠い距離を

わたしたちはこの町で感じていた

八月の空へ

この場所から

遠い距離をつかもうとすると いつものがれてしまう 失われた時間がつづいているの

だ

届かない思慕のように もっていかれる言葉

過去の傷にふれては 深くよどむ言葉

オキナワモナムール 沖縄我が愛 と言ってみるけれど……

根こそぎの 欠如としての

オキナワ 沖縄 モナムール 我が愛 (オキナワ モナムール)

今はもう冬で

砂糖黍の穂が揺れている南部をあるく

ザワワ ザワワと風に身を揺する不在のゆたかさ

道をすこしはずれたところから

こんなにも世界このよがいいかげんだから 石門に死者の言葉をきぎむかのように

祈ウートオートオーするオハアる 老婆のかぼそい背を 私は見っていました

海風は沖のほうから もっともっとあなたあなたの沖のほうへ この国を吹き抜けてしまっただ

ろう

(「詩手帖☆飛燕」第2号より)

チボリ公園の夜

T I S A T O

クリスマスの夜

彼女は 彼とデートをしない

サンタクローズもどきの

赤い服に 身を包み

別な恋人たちの エスコートをする

漆黒の中のイルミネーション

点滅する灯り

えんえんと続く きらびやかな道

彼女は 商業用の作り笑顔で

小さな子供をつれた 家族連れを案内する

大きな野外舞台では

クリスマスソングが始まり

ゴスペルの合唱が

たくさんの耳から耳へと

聖夜の星空に 響きわたる

恋人に クリスマスプレゼントなんて

一度も もらったことないね

そういうおつきあいは したことがないから
でも この頃は クリスマスの夜だけの

ひと夜限りのおつきあひも あり の時代だよ

ネオンに彩られた観覧車には

待つひとの

ながい ながい列

恋人たちは 今夜

いくつ 本物のキスをするのだろう

そっと耳打ちする ひとりの男の声

クリスマスプレゼントがもらえるなら

何がほしい？

振り返れば 誰もいない

耳元でつぶやいて

風のように去っていったのは だあれ？

月夜の水浴び

三井喬子

萩の花が零れる細道を行く
水浴びをしに

しらしら明るい河原を歩く
老婆と女とその娘と

猿たちも連れ立って行く
水浴びをしに

老婆の背中の袈裟懸けの刀傷
女の乳房の菊花の瘤

娘の太腿の八手のような火傷跡

(丹念に洗う猿の毛深い手

月がブナの樹冠に隠れるころには

三人と猿たちは 微かな「過剰」に紅潮して

水沫に滑る あ

岩に隠れる ふ

苔の上でこねられ れるるる

(これは あふれる ちいさなもいろのものがたり

る る るるるるる

中身のぬけた皮袋には

谷川の水をつめてふたをする

しらしらと それでも明るい萩の道を

三人と猿たちは帰る　るるる　るるる　るるるるる

(無口な唇は　罪びとのように少し開かれ

道はうつすら濡れて行き止まり

指・耳・目

河合民子

触ってくるのは私の指

耳が聴くのは

あなたの手ではない

聴いて 聞かない 聴く聴く あなた

私 いやいや いや いやん

…きみは

…うん

…きみは

…うん

ううん ううん

君が見たんだね

僕の夢を

夢の中で僕とモロツコにいたんだね

…うん、

ワタシハ 男ト 旅シテイタ。乾イタ空氣ガ流レテイテ 私ハ 喉ガ渇イテイタ。乾イタ喉ヘ大量ノビールヲ流シタガ、不思議ニ 汗ハ流レナカッタ。男ハ、白イ麻ノスーツ姿ダッタ。皺ノ寄ツタ麻ノ感ジハイイナ、ト私ハ、指デ男ノ上着ヲ確カメタ。指ハ目ノヨウナ確カサデ ソノ麻トイウ纖維ノ豊カサヲ感ジテイタ。イツマデモ触ツテイタカッタケレド、馬車ガ出発シタラ、私ノ指ガホドケテシマッタ。指ハツマラナカッタ。

私ハ男ヲ愛シテイタ。シカシ、トテモ疲レテイタ。男ハ 私ノコトヲ コノスーツト同ジヨウニ 思ツテイルノダ、ト。私ハ、男ノコトガ、息苦シクナツテキタ。

古イ城壁ヲ巡ツテイタ私タチノ馬車ニ 石ガ降りダシタ。城壁ニ 人ガタクサンアラワレテ、私タチノ馬車へ 石ヲ投ゲツツケル。マルデ憎シミガ降ツテイルヨウダツタ。私ハ頭ヲ抱エルト、グツタリト動カナイ男ニ氣ガツイタ。目ガ驚イタ。降りツツク石ハ不思議ニ男ニバカリ当ツテイツタ。ナゼカ私ハ傷ツカナイ。男ノ麻ノスーツガジクジクト血ニ染マツテイク。ソレヲ眺メ 濡レタヨウナ麻ノ繊維ヲ触ル指。涙ヲ流ノスハ、指。

男ハ私ノ指先ガ血ニ染マツタノモ知ラズニ息タエテイタ。私ハ城壁ノ人ヲ見タ。暮色ノナカデ 石ヲ投ゲツケル タクサンノ人。タンサンノ人ハ同ジ顔。私ノ顔。怖イ顔ヲシテ 泣キナガラ イツマデモ 石ヲ 投ゲテイルノハ 私。目ガ見タ私。

…うん、二人でモロツコにいたの。あなたは麻のスーツを着ていた
ジューシュー焼いた鰯をフランスパンに挟むと美味いらしい

…うん、血の色のようなトマト・ジューズだった。鰯はなかったけど

…うん、楽しい馬車の町巡り

見つめる指が触るのは

麻のスーツ

指が見るのは

モロッコの耳の夢

耳が聴くのは、夢の残像

耳の奥の、目の奥に

夢はひっそりひそひそ

指が触りにやってくるのを待っている

ふわりふわふわ

ふわあーと夢

霜月大和

倉田良成

京都から奈良へ、また木津川を渡る。

霜月の竹叢たかむらはほの日に照りて浅く流るる冬河を越ゆ

高畑大道町。

社家の簷のきひそと寄りたる辻の岐れは柳生につづく白き道なる

新薬師寺。

白壁はとこしへの春にあるものを庭の小菘はもみぢしにけり

春日山。

けんらんと銀杏葉は地に散りしきて春日の森に迫る夕闇

春鹿酒造で銘酒「南都諸白」をもとめる。夜、宴。

梁垂木に酒精は時のごとく浸みてうまさけの身はかをり放てり

東大寺は鹿野苑ろくやおんになずらえたのか。

夜来の雨はあがりて冬鹿のはつか斑に芝の露ふむ

室生寺三宝杉。

悲に触れてその森蔽のぬくもりに歎きさへ抱く木の高さかな

室生寺金堂。

しぐれ去ってみほとけに飛ぶひかりかな破風のこけらは時を経につつ

橋本屋で精進料理の昼食。

荒行のときになまめく須臾あらむこの山芋の肌理きりは如何にか

聖林寺十一面観音三首。

夕映えの箔碎けながらみほとけの御衣おんぞを染むる深ききらめき

法樂のほそき御腰を撓ませてはつかに人をかなしみにけり

おもごしは御手とかそけく係がりぬとはに昏れゆく西を浴びつつ

東に帰って。

風啼くや町は師走のにほひして

静かな一本の木

足立和夫

斧を振り上げて木を切ると
切り株の切断面から
鮮血が滲み出てきた
際限なく
紅の色が滲んでくる
それは悲鳴の声のようであり
恨みの涙のようであり
なにか
決定的なものだった
血の無音の咆哮は
われわれへの告知だ

木だけではない

まるい地面からの

復讐のしるしのようにもあつた

実はそれがなんであるのか

人はわからないままだ

いたましい木と血に

ほとんど気がつかない

血にぬれた静かな木よ

虹のかかった地よ

なぜ血は乾かない

赤い月が浮かぶこと

それが答えなのか

静かな一本の木

静かな血の流れから

飛沫となった真つ赤な血潮

われわれは忘れることはできない

まちがいない人は

不吉なつむじ風のなかを彷徨い

生きている

ただひとつだけの苛酷な生涯を生きる